

# 松富かおりの「世界と日本の安全保障」⑩

## 「停戦交渉を見据え 激化するウクライナ戦争」

ジャーナリスト・元駐イスラエル大使夫人 松富かおり

台風の為、日本のテレビニュースが海外情勢を伝えなくなった8月。ウクライナでは大きな変化が始まっていた。

4日、クリミアで、ロシア艦隊の潜水艦ロストフナドヌーが撃沈され、ロシアの誇る地对空ミサイルシステム「S400」にも損傷を与えた。この所、守勢に立たされていたウクライナが反撃に転じたのだ。そして、6日、ウクライナはついに最大規模のロシアへの国境を越える反転攻勢を仕掛けた。ロシアのゲラシモフ参謀総長はこれを兵士約1000人と報告したが、実際には数千から1万人規模だったという。

ウクライナは「逆転への賭け」に出たのだ。ウクライナ軍は隣国に進撃し、13日、ゼレンスキー大統領は「74集落を制圧（ロシア側に

よると28集落）」14日には「1日で100人以上のロシア兵を捕虜にした」と通信アプリに投稿。司令官は「約1000平方キロメートルを制圧した」と主張した。事実なら1週間、東京都の約半分の面積を制圧した事になる。

ロシア側も応戦しているが、クルスク州とベルゴロド州2つの州で非常事態宣言が出され、地元当局は約20万人が避難していると公表した。報告を受けたプーチンは烈火の如く怒ったという。ロシアが第2次大戦後、大規模な国土の占領を一時的にでも許したのは初めてと見られる。この奇襲攻撃の成功で、ウクライナ軍の士気は高まった。一方、ゲラシモフ参謀総長（露）の越境攻撃の兵士数を1000人と過小報告した疑いなど、プーチンは軍司令部に不

満なようだ。今やクルスク州の指揮は軍ではなく、ボルトニコフ連邦保安局長（FSB）がとっている。プーチンの後継者と目される1人だ。

実際、この奇襲攻撃の成功の裏にはロシア軍の油断があつたと思えない。22日になると燃料輸送用の貨車30両を積んだフェリーが炎上・沈没。

ウクライナメディアは国産の巡航ミサイル・ネプチューンが使われた可能性が高いと伝えた。ゼレンスキーは「複雑な作戦だが、計画通りに進んでいる」と先行して攻撃

を仕掛ける事でウクライナ領への攻撃を防いでいると胸を張った。

両国は捕虜の交換で合意。双方から115人ずつが解放された。プーチンは、徴兵された新兵の拘束が長引けば、社会不安が広がりがかねないと交渉を急いだようだ。ゼレンスキーも捕虜交換の為、多くのロシア人を確保する事が

攻撃の目的の1つだったとしたが、最大の目的は近い将来行われるだろう「停戦協議」で、少しでも優位に立ちたい、という事だ。11月のアメリカ大統領選が終われば、「停戦協議」への圧力が強まる可能性がある。ロシアも同様で、だからこそ、奇襲されても、これまでに占領したドネツク州から援軍を出すことができなかった。双方が「停戦交渉」の日までに、どれだけ広



松富かおり著

「明日は戦場にいるかもしれない」

2014年～2016年、イスラエルに特命全権日本大使のパートナーとして赴任。

書籍購入希望者は下記へメールで

著者サイン入り・送料込みで2300円

kaori.matsutomi@gmail.com

い領土を制圧・占領できているかが「停戦」の中身に大きく影響する。

ウクライナ軍はセイム川の3つの橋を爆破。ロシア軍の補給・増援ルートを寸断した。これで「兵糧攻め」を展開、支配地域を1900kmに広げる狙いだ。プーチンは市民の生活には大きな影響が出ないよう配慮し、侵略への支持をなんとか繋ぎ止めている。これを揺さぶる意味は大きい。プーチンのお膝元モスクワ郊外に大量のドローン攻撃を繰り返すのも、市民の間に動揺を広げる意図がある。勿論、ウクライナでも厭戦気分は広がり、57%が「停戦」を望む。

## 『カミカゼドローン』の活躍

ゼレンスキーは、ウクライナ製の新型ドローンが実戦で成功しているとし「侵略者に対する新しい報復の手段だ」と語った。複数の高精度カメラが付いた中国製の民間用ドローンにバッテリーやロケット弾を粘着テープでとりつけた改造ドローン。「こいつが正確な操作で敵に体当たりし、確実に仕留める。角度さえ良ければ、戦車の装甲だって貫通する」ウクライナ兵が説明する。

実はこの『カミカゼドローン』はロシアも重用している。イラン製ドローン「シャヘド」だ。ピストンエンジンで動き、ノイズが大きい為、敵にみつきり易い。しかし、プロペラで低速飛行できるため、レーダーには引つかかりにくい。コストはわずか5万ドル。アメリカ製のリーバードローンの3000万ドルに比べるとただのようなもの。目標に当てて、自爆させる。今では、イランからライセンスを買取り、ロシアでも作っている。

ロシアは「グライド・ボム」も多用する。何しろ、ソ連時代からの旧式の爆弾が山ほど残っているのだ。これをナビゲーションシステムのついたグライダー型のドローンで運ぶ誘導滑空爆弾として使う。1:5トンの爆弾ならビルを破壊し、ウクライナ軍の地下施設も潰せる。わずか1万ドルでできる手軽な武器だ。小型で低空飛行できる為、レーダーにも見つかりにくい。ロシアは滑空爆弾を毎日100発以上投下している。ウクライナ第2の都市ハルキウを8月31日に攻撃したのもこの滑空爆弾だ。集合住宅が直撃を受け子どもを含む59人が負傷、20人は重体だ。

ゼレンスキーは「ロシアは市民を標的にしている。基地のロシア軍機を出撃前に破壊できる能力があれば、今回のような悲劇は防げた」と主張する。これは、ようやく2023年の防衛白書で、日本が持っている事が明記された敵基地攻撃能力だ。自分の国を攻撃する準備が刻々と成されていくのがデータで詳細に分るのに、みすみす手をこまねいていなければならぬというのには耐え難い事だろう。先日、イスラエルが、レバノンの武装組織ヒズボラが襲撃準備を行っているのを自国とアメリカの情報で確認。直後に戦闘機約100機でヒズボラのロケット弾発射筒数千を破壊。その結果、残った勢力が320発以上のロケットでイスラエルを攻撃したが、犠牲は死者1名、軽い怪我2名に抑えられた。

ゼレンスキーの越境攻撃のもう1つの目的は、ウクライナが頑張っているのを見せる事で、援助疲れの見える西側を再度惹きつける事だった。実際「ウクライナは負けるのだから援助しても無駄」といったハンガリーのオルバン首相のような消極論は影を潜めた。

そして、この越境攻撃が見せつけたのは「核の抑止力の限界」だ。これまで、核をもつ大国を大規模攻撃した例は歴史上なかった。プーチンは「すぐにでも核を使う用意がある」と言明していた。しかし、実際に攻撃を受けても、すぐには使えない。今、アメリカやNATOを敵に回し、第3次世界大戦を起こす準備はできていないからだ。これまでの「レッドライン」は「レッドライン」ではなくなった。この点は、中・露・北朝鮮と核保有国に囲まれ、日々、領海侵犯や領空侵犯に脅かされている日本にとって、非常に大きな参考になる。ただし、「プーチンはロシアが負ける、あるいは政権が崩壊すると思えば、躊躇なく核を使うだろう」というプーチンを知る専門家の見解は胸に刻んでおくべきだ。全く「レッドライン」が消えた訳ではないのだ。

これから冬に向かうウクライナでは間もなく道路が泥濘に覆われ、やがて雪や氷が地上の戦闘の障害となる。その前に、できるだけ交渉に有利な条件をウクライナが得られるよう折る。武力による現状の変更がなされる理不尽な例はこれ以上見たくないから。